



大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成20年
8月号

通巻456号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

発行日 平成20年8月23日
発行所 大倭出版局
〒631 0042 奈良市大倭町1の12
電話 (0742) 44 0015
印刷 大倭印刷
定価 1部 250円
年間購読料 3,000円(送料共)
振替口座 01050 6 67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



昭和21年冬(?)長崎浦上天主堂下の葬列 井手桃太郎さん撮影(文・5頁)

昭和38(1963)年8月23日 月次祭法話より

宗教的生命を外に伸ばす

法主 矢追 日聖 (満51歳)

霊界大倭を代表して

関西地方のお盆の行事も、ちょうど五日で大体終わりました。今年も、旧七月十五日の九月二日が、大倭では東光祭、夏のお祭りということになっております。世間のお盆はご先祖についての行事として、皆お参りされておられると思います。

大倭の東光祭も、ご先祖に対してのお祭りも兼ねておるのでございますが、この旧七月十五日は大倭教の発祥に係る記念の日にあたり、大倭が日本において、神意に沿った宗教として立つという非常に意味のある日となっております。

終戦直後昭和二十年八月十五日に霊の世界から、日本における本当の宗教の形として出るんだと、天空にその神意を表してくれた日(先月号、東光大祭について等参照)が、旧七月十五日にあたります。

その日が、たまたま仏教のお盆の日と同じでございますが、何も計画しておらないのですが、このように仏教の行事と似たものに一致する場合があります。

大倭教は別に仏教には関係しておりません。純日本の国の宗教であり、神道というと語弊がありますが、日本的な神ながらの教えです。その建前において大倭教では、一切を神意に沿って動いて来ておるんですが、それがどうも仏教に縁のある日が多いという具合になっておるん

ですね。

それは一つに私が思うんですけれど、現界の大倭はこんな小さな宗教団体の形をとっておりませんが、霊界における大倭というものは、その権威、位置、あるゆるる角度から見て、名前の示す通り、「おおやまと」「大親元」、即ち総本家ということなんです。

私はその大倭の代表者として、この世に生まれてきました。その霊界からは、私が十二、三歳の頃より、聖徳法主日聖と呼ばれており、それが私の本当の名前です。現界では日聖だけにして戸籍も直していますが、皆さんの前で、こんなこと言うのは初めてです。

というのは、この前コックス女史(*)に見抜かれましたから、申し上げておるんです。

コックス女史来訪

私は昭和十九年まで東京におりまして、その時に、いろいろな霊能者、宗教家という方々にお会いする立場に置かれておりました。我こそは日本一也、という霊能者にも沢山会^いつてきております。ところが、私から見ると、みな如何物^{いかもの}が多いんですね。その人たちの霊界観を聞いてみても、わかつたようであつてもさっぱりわかつていない。日本の霊能者というのは、どうも大したことはないなと思つた私は、世間をあちこち歩き回つて、偉い霊能者を探して勉強しようという気持ちにもなれませんでした。

私自身、直接霊界を見ておりますから、自分なりに霊界に対しての考えを持っております。いつか大倭として対外的な仕事をする時には、大倭独特の霊界観に基づく宗教観でもって進み、自分一人がやっていくという決意を腹に括つておりまし

た。そして終戦と同時に昭和二十年から出発したわけです。

コックス女史とは十一日にここで初めて人間としてお目にかかりましたが、大問題である霊界観、そこから滲み出てくる本質的な宗教観、これらが実にびつたりと一致しているんですね。これぐらいいきつちり合うということは、奇跡に属すると、通訳の方に伝えました。私だけが見ておると思つた霊界が、コックスさんの見ておられる霊界と同じなんです。これには驚きました。

日本は昔から神さんとか、信仰、宗教とか、やがましく言ってきた国なんです。そのかわり勿論迷信も多いですけどね。コックス女史は英国の方であるし、宗教においても、色々な習慣しきたりにおいてもすべて違つております。その方に、きつちりと霊界の話しをされて、自分でもあまりにも似ておるので、本当に奇跡を感じるくらい驚いたのです。

我こそはという日本の霊能者でも、あの人程わかつている人はいないと思ひます。そうした他国の方に、今年期せずしてお会いできたことに対し、大倭としての裏付けでもあり、心強いような、非常に嬉しい感じがいたしました。初めて会つたけれど、二十年も三十年も昔から会つているように話しをしておりました。

霊界の動きのままに

日本における宗教を求める人々は、あまりにも精神的にみすばらしいんです。腹が減つたから飯が食いたいと、空いた腹に飯を放り込むような気持ちで、自分の利欲を満足させるために宗教を求める。こんなこと言つと、あいすまないんですけど、そういう低級な動機でもって信仰しているの

が、日本の一般の信者ですね。

しかし宗教によつて、人間の魂が救済されなければいけないんです。その観点からいくと、大倭の宗教というのは程度が高いということが言えます。本當の救済は高い宗教でなければ出来ません。最低のものを救うには、最高のものをもつてこなければ、救済にならないんです。

大倭の教えなり今後のいき方というものは、私自身が霊界を通して、その指導原理によつて定めています。ですからいつも無計画の中に計画があると申しています。人間が浅知恵を絞つて計画しなくとも、霊界において既に青写真が出来上がつている。また大倭の組織でもつて、どうだこうだと括らずとも、霊の世界がそう動いてきていますから、無統制のように見えても、そこには整然たる統制がある。

だから私は自分はロボットだ、頭の中はからっぽだと、コックスさんにも話しておつたんです。霊界から右向け言われたら右向き、左と言われたら左。前進めと言われたら前へ行き、一服せいなら一服するということにすね。

私は霊界の大倭を代表して現界に生を受けてきております。自我というものを働かさないうで、霊界の計画の通りに、神の心のままに、素直に万事が動いておるんです。人間の力で動いておるのではない。

昭和二十年の終戦から現在までの十七、八年の大倭の動きを見ましても、すべて霊界の力において、今日の姿になつてきたと私は信じている。不思議にそうなつてきていますね。

自己と霊界との交流

大倭はそういう宗教であるがために、哲学や知

識を通して宗教を知り、求める人には、なかなかその深さ、味というものが理解しにくいし、掴み難いことは事実です。

そこで最近、結構なことだと喜んでいますが、今ここにも来ておられる皆さんが協力して、お互い精神の練磨をはかり本当の霊界を知り、自己の向上を図っていくという目的において、精神統一の会が月に一度なされております。

これが世間でよくあるように好奇心のみでやる、例えば精神統一をやって、ものがよく見える、或いは聞こえるとか、三日月四日先のことが見通せるとか、そういう霊的能力だけを求める会であるなら、それはまったく神意に沿わないんです。

霊能力というものは全て自己を完成していくための一つの方法なんです。仮に精神統一会をやって霊能力が発揮されたとなると、それは霊界と現界との距離が近くなってくるということなんです。そうすると霊界はこうだ、だから現界はこうでなくてはならぬ。霊界がこうであるなら、自分はこういう歩み方をしなくてはならないということに気づく、というように、結局、霊界がわかってくれば、自分で自己の使命や運命のようなことがわかってくるんですね。外部から教えられるのではなく、自分の霊魂から滲み出てきたところの自己を、今度は作り上げていく。人間的に修養していくということになるんです。

大倭の宗教そのものは、私自身が宗教哲学を勉強したりして始めたものではありません。私の宗教的いき方、宗教的使命というものは全て霊界の仕事なんです。私は大倭代表として人間界に生まれてきておるだけであり、自分で計画して宗教を作り広めるといった教祖とは意味が違います。

自分の霊魂と霊界とがお互い交流していくような、また霊界と現界の両方にまたがってそこに相

通じるものがなければ、大倭の宗教のよさ、宗教の味というものがわからないんです。

指導者としての資格

今後、外部に活動を開始する際にも、教師、導師、或いはリーダー格、幹部といったものが少なくとも必要となってきます。

その者たちは、全て霊界を通してきた基礎の上に、自分の霊魂から滲み出たところの宗教観や自覚や信念がなければなりません。霊界というものがよくわかり、自分の霊魂が霊の世界の中に溶け込んでいくようにして、霊界がどんなものであるかということ、自分ながらに悟れるような人でないと、大倭の教師として人を指導する資格はありません。ただ哲学をやり宗教教理をどれだけ勉強しても、それは知識から得たものですから薄っぺらなものです。

自分の霊魂、魂から湧いてきたものでなければ、大倭としては絵に描いた餅と同じことなんです。自分のものでなく、一時の借りものにすぎない。また、ただ霊界通信や、自動書記ができるという霊能力を通して一現象に捉われるのは好奇心にすぎない。それは神意に沿わない。それよりも自分の霊能力を発揮すればするほど、自分個人というものを、自覚させるような出方が本当なんです。大倭は、これからそういう方向で幹部養成していかねければいけないと思っております。

大倭における禊の形

霊界にもかたまりがございまして、大倭というのは、その総本家です。そこから指導され、自己を練磨していく精神統一のような動作である行の

ことを、大和言葉で禊すがらと言います。

禊とは、自分の今日までの罪というものを削ぎとつていく、罪そぎということですね。そのあとに御稜威みいずという、神さまのお徳が注がれるということが行われます。

御稜威とは大御稜威おほみりとも言い、神さまの前にある水に例えた、神さまのお徳のことです。罪を削ぎ垢を拭き取ると、今度は浄化したきれいな魂に神さまのお徳という水が入るんです。「ツミソギ」が「ミイズソギ」、即ち、「ミソギ」ということです。

ですから大倭という地盤の上で、禊を始めた場合、罪そぎから始めます。ものが見えたり聞こえたりとそんなことは、あとのあとまわし。

まず一番先に、礼儀作法、挨拶の形式が出てきます。手を合わせる、伸ばす、広げるという形です。ちよつと相撲取りが土俵の上でやっている、あの形式にもよく似ています。

昔の古い祝詞に挨拶の仕方の形式として、「鶴つるじもの頸根くびね衝つき抜ぬけて」という言葉で言われています。「鶴つるじも」は、鶴のことです。「頸根くびね」は首筋。合わせた両手をものすく向こうに行き着くように伸ばして、その間に鶴のように首筋もずつつと伸ばして頭を下げるような挨拶の仕方ですね。

その形式が霊界の大倭の挨拶です。ですから大倭で禊をやり入神状態になると、始めのうちはこの挨拶の形式から出発します。

その次には、自己の修養ですね。自分の欠点を自分で自分に指摘していくという出方です。それが罪そぎ。罪とは、言い換えれば包み隠すということなんです。

精神統一をして霊動を起こすと、全てその人その人に応じて大倭の霊的指導があります。その入

神状態のとき、人が聞いておつてもおらなくとも、今までの色々な事や考え方が誤つておれば、それを口に出して喋る。喋るけれど自分が意識してるから、こんなかつこ悪いことを言うまい言うまいと抑える。抑えると自分の頭をカーンカーンと殴ることもあるし、もう忤心なしにこみ上げてきて、恥さらしのことをさせられてしまう。経験した方はわかりますけれど、どれだけ恥だと思つても、一切の罪そぎというものを自然に自分の口から全部吐き出してしまつてます。

もし自分がそれを否定した場合、その否定に対して靈魂のものですこい抵抗が出てくる。肯定して初めて心が静まるんですね。

その罪そぎがすむと、神さまのお徳を貰つて、本当の御稜威そそぎが始まる。そうなれば自分個人の精神状態を直し、一生この道で行かなければならんという、自分の使命を自分で自分に教える。自分が何も考えていないのに、自分の口でもって自分で教えるのだから、これくらい確かなことはない。

大倭の禊というものは、すべてそういう形をとつています。そういう自己の修養が完全に出来上がつて初めて、自分以外のことについてわかつてくる。そこから靈能力の出でくる基礎が出来てきます。

特集 私と戦争(上)

引揚げから戦後を振り返つて

神奈川県横須賀市 中村 健

私は、空襲を知らず京城(南朝鮮)で小学校を迎えたのですが、その頃、上空に米軍爆撃機B29

そうでない狂人に刃物を持たせたような結果になつてくる。世間では下手な教祖がそれを平気でやってるから、やはり本当の靈界の指導がないんだと、私は見ております

世間でやっておる精神統一や靈能力の開発など、今までかなり見てきていますが、ものが見えた、聞こえた、或いは幽体分離してどこかに行つた、或いは先は何が起こるかを予測するとか、手が自然に動いてどうとか、病気で助けることができるとか、そういう現象は出てきます。

そういう時に立派な人だとおだてられ、人間個人の向上、宗教的な修養というような人間を作ることよりも、日本一の靈能者のつもりになつてしまい、何々教の教祖さんに祭り上げられてしまふんですね。その程度の靈能者は、日本全国に星の数ほどおります。

ある程度努力し、靈能力を發揮する時期に遭遇した時に、そういう現象は出ます。出ますがそれは長続きしません。長くて三年続けばいいところです。靈界から指導されて、本当の自分の魂から出てきた能力ではないからです。

大倭のいき方

大倭の場合は自分をまず作り上げ、自分が出来

先着順

が頻繁に偵察に飛来するようになり、伯母が料亭を開いていた現在北朝鮮の、ある小さな漁師町に越して来て数カ月後、終戦を迎えた訳です。

父は伯父(母の長兄)が経営していた朝鮮半島沿岸の缶詰工場の技師で、長兄は満洲鉄道の乗務員で、2人も出張が多くほとんど家にいない時

で初めて人に対して指導教化していくという順序が、大倭のいき方なんですね。私のいき方ではなく、大倭の靈界がそうなんです。

ぼつぼつ私も活動の時期に近付いたことを予期しており、これから禊を通して、人を教化していく人間を作っていくことが、必要だろつと思つています。

幸いにして今日、大倭の新しい事業のブロック製作工場が、全て門人の手によつて、めでたく棟上げが行われました。いよいよ来月の初め頃から、生産にかかる見通しまで漕ぎつけています。

これからは皆の善意の集まりによつて、その利益を打ち込んで宗教活動にぼつぼつ本腰を入れていく、そのような時期になりました。

だから、皆さんにもそのおつもりで、大倭の宗教的生命を外に伸ばそうという、ファイトを持つて今後も信仰を続けてほしいと願つております。

(*)コックス女史

エドナ・コックス夫人。英国心霊学者。

コックス女史についての関連記事は、『おおやまと新聞』第3号(昭和39年10月31日発行)、『おおやまと』第313号(平成8年9月号)に掲載されております。

(文責・編集部)

が多くて、家族は母・姉・兄(昇次13才)・私(9才)との生活でした。

私が終戦を知つたのは、夏休みの8月15日。大事な放送があるので校庭に集まるように言われ、お昼の12時、暑い天気の下で玉音放送を聞き終戦を知りました。

その後間もなく駐在所のお巡りさんは虐殺され、数日後、日本人はまとまった方が良いとの事で、1軒あつた映画館に集まり、そして長屋に収

容され集団生活になりました。その間、自宅の中は家財・衣類が民衆による略奪にあり、大通りでは歓迎されていたソ連軍の戦車が境界線の38度線に向かって走り去って行きました。

その後、境界線まで歩いた方が良いとの事で、約20名毎の数グループに分かれました。私の家族は、伯母・母・姉・兄・私と、親類の女の子（6才）が丁度夏休みで遊びに来ていたので総勢6名でした。私と兄は毛布1枚背中に、間道を山から山への道中——山では火を起こすと住民に見つかるに注意されるので、食事は最小限に作る。金目の物は略奪されて持っていない。風雨が強い時は民家の軒先を借りたり、家の中に入れて頂いたりしながら歩き続ける。姉を嫁にと言われ、母が困っていた事もありました。

境界線近くで伯父と合流し、長屋に收容されましたが、夜にはソ連兵がたびたび乱入して来るので、その度に姉は床下の穴ぐらに隠れる。娘をかばって射殺された父親を、山に埋葬する様を朝方に目にする事もありました。

その後、伯父の関係で闇船の漁船で38度線を越えて、やっと南朝鮮に入りました。上陸と同時に背中にDDTを吹きつけられ、数日後、米軍の上陸用艦船で九州の佐世保港に帰国しました。

東京山ノ手線内代々木の伯父の家で長らく厄介になりました。私は鳩森小学校の4年生で、当時は教室が足りなくて交替で使用のため、明治神宮での青空教室でした。2年後、世田ヶ谷の引揚寮に移り間もなく、長兄がシベリア送りの収容所を脱走して鉄道で南朝鮮より引揚げて来て、6畳一間で6人の生活が始まりました。

父は後日の便りで、引揚げの途中で死亡したと（昭和21年3月）、器が1個送られて来ました。4年後、京王線八幡山の二軒長屋住宅（2DK）

に引越して、やっと人間らしい生活に入りました。その間、兄の昇次は慶応大学病院で診察を受けるも、2才の時の耳の病気で鼓膜に穴があいている、現医学では移植可能だが、もう手遅れとの事でした。一時、聾学校にも通いましたが、年齢の差が大きく長続きしませんでした。私も高校生となり、長い人生が始まりました。

戦中時代は、あまり思い出したくない心境ですが、今回編集部から声をかけられ振り返ってみました。地名や期間は思い出せなくて判りにくいと思いますが、外地で空襲を知らずに終戦を迎えられたのは幸せだったのかもしれない。

あれから数十年、母は平成9年93才で老衰のため亡くなり、長兄（大正12年生）は病気で入退院を繰り返して、姉（昭和元年生）は体調が悪く歩く事は困難という現在です。私は上の子2人は独立、下の娘と3人家族で、定年後は自治会の役員やらでけっこう忙しい余生を送らせて頂いています。兄・昇次は大倭の皆さんに大変お世話になり、幸せな人生です。勝手なお願ひではありますが、今後ともよろしくお願い致します。

写真が語るもの

（提供者）奈良市 井手 泉

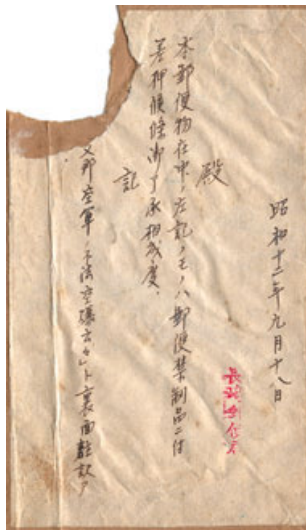
表紙写真について

昨年来、井手さんから長兄・桃太郎さん（大阪府高槻市・昨年10月帰幽・享年87歳）が原爆投下後の長崎を撮った写真が何枚かあるはずと伺っていました。今回、それらが見付かり届けて下さいました。表紙の写真はその中の、生前のお兄さんが「とても心にしみる光景だった」と話しておられたという1枚です。昭和21年は、お兄さんが復員されて間もない頃とのこと。（編集部）



▲長崎で写真業を営んでおられた傳次郎さん（井手さんのお父さん）に、出征中の弟子から送られてきた写真より。昭和12年8月6日天童路付近を埋めた避難民（上海）

▶その封筒には、没収された写真があったように「本郵便物在中ノ左記ノモノハ郵便禁制品二付、差押候條御了承相成度」と長崎郵便局の書き付けが貼られている。因みにお父さんの写真集も検閲下で出版された。



▲大浦天主堂、父・傳次郎さん製作のポストカード。こんなものにまで、右端に「昭和14年12月6日長崎要塞司令部検閲済」と印刷がある。

▶表面の「検閲済」のゴム印



軍隊時代を回顧して(前)

茂毛露園 安田富輔(85歳)談



小さい時の思い出ですが、何かおかしいなと感じることがいくつもありません。

まず満州事変です。次いで私が小学五年生の時に二・二六事件が起こりました。あれは昭和維新の大きな事件でありシヨックでした。中学一年生の時には盧溝橋事件が起こったわけです。どうも胡散臭い感じでしたが、表立って言える時代ではありませんでした。

陸軍が言ったことは何でも正しいんだと思いつまされ、どんどん聞かされたけれども、何かおかしいおかしいと思いつつ続いていたんです。そして日支事変が始まって泥沼に入り、どうにも抜き差しならないようになっていきました。

私が就職をした年である昭和十六年十二月に大東亜戦争が始まりました。開戦の日にはハワイの大空襲で大戦果があり、日本国民は湧きにわいたわけです。私は落ち込みました。一番怖がっていた世界で一番強い国と言われているアメリカを相手に戦争を始めてしまった。父は日経新聞の前身の新聞社で記者をした後、出版関係の仕事をしていた人ですが、「アメリカ相手だともう勝てないよ」と言い続けていました。私も色々本を読んで、アメリカが相手ではちょっと勝てんぞ、という感じがしていました。とうとう中国だけでなしにアメリカまでも相手にしました。これでは世界中が大戦争になってしまうという非常な恐怖感がありました。

軍隊生活

昭和十八年十一月三十日朝、大阪駅発の列車で学生服に襷を掛け、本籍のある香川県の普通寺まで行き、文科の学生の徴兵猶予が無くなった昭和十八年十二月一日、西部三百六十五戦車部隊に入隊し、厳しい訓練を受けることになったわけです。その時父からは、「富輔、この戦争はあと二年もすれば終わる。わが国は負ける。無駄に命を失わないで帰って来るように」と言われました。

軍隊生活では随分日本の陸軍はいいかげんだなと思いました。まず初年兵いじめです。古兵が初年兵をしごくわけです。一人がへまをすると連帯責任ということで、全員並べてぶん殴るのです。これを私的制裁と言います。表向きは禁止になっているから、将校がいると皆知らん顔をしてやらないんですが、いなくなった途端に始めるわけです。将校はそれを知っているんだけれども、時の軍隊の気風から言って、文句を言おうものなら皆いうことを聞かんようになっていきました。

私は剣道が得意だったので、正課の銃剣術の間では平生意地悪をする古兵を片っ端から倒した。将校と言えども手加減はしないというわけだ。どんどんぶっ倒した。そのうち、あいつに手を出すと危ないぞというふうになってきたんです。

当時、二百五十名の学徒兵が入隊したんですが一人夜中に行方不明になり、全員で探しましたが車庫で首を吊って死んでいました。軍隊の厳しい訓練に耐え切れなくての自殺でした。翌日、学徒兵全員が兵舎に集められ中隊長から叱りの言葉があり、学徒兵はなっとらんと言われた。しかし、戦時中ですから訓練が厳しいだけならそんなには音をあげなかつたと思うんです。

普通は一年間初年兵になって、その間、古兵の

洗濯から兵舎の掃除、食事の世話から全部初年兵がやるわけです。だから初年兵は朝起きて夜寝るまで自分の時間は零です。自分一人の時間は便所に入っている時だけです。

夜は古兵が掃除なんかを点検する。髪の毛一本でも落ちていたら全員を招集してぶん殴る。なんかミステイクがあると因縁をつけてぶん殴るわけです。夜の六時から九時までの間は初年兵のぶん殴られる時間みたいなものでそれが習慣になっていた。私はそれで随分強くなりましたが。

初年兵の時でしたが、訓練中に右足を骨折したまま訓練に出ていました。明日命がなくなっても大丈夫という覚悟をせんらんと思っていましたから、生活態度も真剣だったしね。こんなんで負けておれんというわけです。ところが、麻疹(はしか)に罹ったんです。伝染病ですから即日入院。骨折したくらいでは入院できなかつたけれども麻疹では入院させられました。

入院中に同期の学徒兵たちはビルマに出て行き東シナ海で米軍の潜水艦に襲撃されて轟沈し全員が亡くなってしまいました。退院して残った新兵は私一人でした。

連隊に帰って来ると次の初年兵が入って来ます。退院すると同時に古兵になったわけです。私は初年兵いじめはやりにくくなつたから殴ることとはしなかつた。そしたら今度は、古兵が初年兵を殴らないと言って私を殴るんです。それでも頑なに初年兵を一度も殴つたことないんです。但し訓練は厳しくしている。もう訓練の指導者になつていたわけです。理想の軍人はこういうやり方やぞ、と古兵に見せ付けたわけです。以降、初年兵は私にいろんな相談事を打ち明けてくるようになります。お互いの信頼関係はとても強くなつていったように思われます。

私の理想の軍人というのは、訓練は厳しく兵營生活は家族的に、俺は兄貴になるんだから、入ってきた弟は、訓練は厳しくしないといけないが、訳の分からんことでぶん殴るのもつての他という考え方です。いくら初年兵を殴らないと言つて、自分が殴られても逃げなかつたです。軍隊において兵隊を殴つたのは一度もない。殴られるのは無数に殴られていますけどね。

憲兵学校入学

やがて憲兵学校の生徒募集があるので受けてみるようにと人事担当の准尉に言われ、四国全体で七百名余りが受験し十二名が採用され、私も合格しました。

憲兵学校に入つたらじめのような私的制裁が全くなくなつたんです。寮に入るとまず階級がなくなり、もう古兵と新兵はない、同一扱いなのが一つ驚いたことでした。

食事も軍隊だつたら一、二分で済ますのでかき込むわけです。それでいて古兵の食器を洗つたりするので時間がない。

ところが学校に入ると、朝は班長会食、昼は区隊長会食、夜は学校長会食。学校長といつたら陸軍中将です。中将というと師団長クラスであり、我々からすると神さんみたいなもんです。そういう人との会食が主体でね。一口食べたら箸を置いて十分に嘔めと。諸君は学校を卒業したら紳士になるんだから、いろんな人と話ができんといかんという訓練でこれも驚きました。

憲兵は卒業したら軍隊の警察官になるんです。陸海軍全部の軍紀の取り締まりなどを担当するんですね。

この学校は入学する時から変わっていました。四国から夜通し列車に乗って午前六時に東京の

中野駅に着きました。私は十二名を引率してしましたので、皆で歩調を揃えて校門に入ると、「止まれ。態度がなつたらん。やり直し」と言われ、学校から駅まで百メートルぐらいいかないんですが、何回も態勢を整えて威勢良く号令かけ、結局校門に入れたのが昼の十二時。六時間かかりました。それでまず度肝を抜かれたわけです。

また入学した途端に目の前に山のように本を置いて、「本来は二年教育だが諸君は戦時中だから六か月教育だから何倍も勉強しないといけない、この本を一日一冊読め」と言つたんですね。そんなに読めるはずないんだけど。

軍隊におつた時は夜の六時から九時までは初年兵を何とか因縁つけていじめる時間だつたのが全部勉強時間になりました。九時に終わつたらすぐに試験があり、試験が終わつたら即採点して成績発表です。試験の好きな学校でした。講義は刑事訴訟、軍事訴訟といったような検事関係。それから、陸、海軍関係の規則。外国語、憲法、刑法、民法などの法律。軍事学、諜報関係、国際関係など山ほどありました。

ところが段々空襲が激しくなりました。夜十時に就寝なんです。就寝した途端に大体十一時から十二時頃に空襲があるわけです。皆起こされて校庭に作つた防空壕に入り込んで待機し、避難民救助のために出動する。早朝に帰校し午前中は睡眠、午後は授業を受けるという日が続きました。

陸軍中野学校

隣りには陸軍中野学校があり、一時期泊り込みで教育を受けました。

鉄道や飛行機の爆破、要するに破壊活動の訓練です。それから外国の諜報。どういふふうに関係人と親しくなつて食い込んで行くかといったよう

な講義です。

校庭の中に飛行機や鉄橋、鉄道の模型がありそれを使ってやるわけです。中野学校は諜報工作教育です。卒業したら海外に出て行って自分で工作活動をするわけです。しかし、最初は諜報工作であつたのが段々と破壊活動集団になつていった。ということは、もう戦争は敗色が濃くなつて諜報活動をやってる暇はないということで、外国をぶつ壊しに行く訓練に移行したんだと思います。

憲兵司令部特別室

七月二十四日に憲兵学校を卒業し、私は憲兵司令部にたつた一人勤務となりました。他の卒業生はソ連へ行つたんじゃないかと思つたんです。その後は聞いておりませんが帰つて来れない人も随分いたんじゃないでしょうか。

憲兵司令部の特別室に配属され暗号解読とアメリカ軍の諜報が仕事でした。それに、陸軍暗号、憲兵暗号、大本営暗号など、暗号種は五種類ほどあり翻訳していくわけです。司令部には全国の軍隊から空襲の状況、被害の状況が逐一入ってきます。それを解読して報告する。

アメリカは日本人向けに短波放送をしてるんです。その中身は何かをチェックする。日本人向けの放送というのは、いかに日本人の捕虜が優遇されているか、豊かな生活をしておるかということを送っているわけです。だから苦しいことは一切言わない。アメリカという国は情報活動が非常に進歩しておりまして。日本はそんなことやっていませんからね。

司令部特別室に行けば秘密情報の山です。御前会議の様々までニュースに入りますから。日本がいかに負けているかということはよく分かりました。(続く)

—聞き手 李章根—

あじさい日誌

この日は、昭和38年7月23日の法話を聞かせてもらいました。本紙7月号「切り離せない先祖と子孫の繋がりに」のタイトルで掲載したものです。

4時から大倭会館で大倭会幹事会が開かれ、8月の行事等について話し合われました。

8月1日 大倭病院開院21周年。午前10時より病院の守護霊「東山坊大善神」の前で、開院祝賀のお参りが行われました。

8月2日 奈良パークホテルにて邑交會。茂毛路園施設長の舟橋宏祐さん、エステイムライフ学園館長の新渡部徳博さんが前館長の三浦龍さんと初参加されました。

8月6日 大倭神宮月次祭夜、大倭会館で邑倭の会。

8月6日(午前8時15分)及び

8月9日(午前11時2分) 奈良市の呼びかけで、拝殿の大大鼓が反保隆臣さんによって打ち鳴らされ、広島と長崎の原爆投下による犠牲者の御霊を慰霊しました。

8月8日 大倭印刷(株)では、来年用力レンダラーの印刷を開始。「おおやまと」の紙面を飾った写真や法主寸言が毎年好評のようです。それと共に今年は甲野善紀さん監修の「古武術介助法力レンダラー」も制作、印刷販売する予定だとか…。

8月10日 午前8時より大倭墓地の清掃。9時より大倭紫陽花邑境内の清掃機が炎天下の中行われ、無事終了しました。

大倭安宿苑では

7月26日 恒例の大倭安宿苑夏祭り。暑さ対策のため大型テン



トを会場に張り、いつもとはまた違った雰囲気の中で真夏の一日を楽しみ過ごしました。

鎌倉は、今なお山手に入れば緑深い。朝夕、人が通れば蝸が話しかける様に、人恋しい様に、次々と鳴き継ぐ。

かなかなや駅と新居の中ほどを 森彦

(茂毛路園)

7月11日、8月8日 6名の方の誕生日のお祝いで、歌がユニットに響き渡りました。

あんない

7月12日 世界各国のコミュニケーション運動をテーマにされている神戸大学大学院の韓国留学生田恩伊さんが取材のため出口三平・久後生歩さん等と来邑され、岸田哲・杉本順一さんが応接。宮崎県の菊地洋一さん、相馬敬子さんが来邑(15日まで)。

7月13日 裸会。

7月15日 大倭神宮月次祭。

7月19日 大倭会主催「弥栄踊り」準備の打ち合わせ会を、夜7時から大倭会館で。

交流の家でF.I.W.C定例委員会。8月は1日、中国キャンプ、4日、韓国キャンプ、それぞれ2週間の予定。

7月23日 大倭大本宮月次祭。

7月14日 大和キリスト教会による音楽会を開催。

(菅原園)

7月17日 イトーヨーカドー出張販売に買い物会。

(須加宮寮)

7月18日 デイサービスも一緒(長曾根寮)

7月29日 外出支援で、なら工芸館、奈良県商工観光館へ。

7月29日 外出手投句箱より、手水鉢ちよぼちよぼ落ちる暑い水、「しだれ花火夜に解け行くメッセージ」

俳句の風物
上田森彦(98歳)
鎌倉も奥やひぐらし人に鳴く 久米三汀

7月29日 外出支援で、なら工芸館、奈良県商工観光館へ。

7月29日 外出手投句箱より、手水鉢ちよぼちよぼ落ちる暑い水、「しだれ花火夜に解け行くメッセージ」

俳句の風物
上田森彦(98歳)
鎌倉も奥やひぐらし人に鳴く 久米三汀

* 月次祭(大倭神宮)
9月6日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四七七回裸会
9月14日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

* 月次祭(大倭神宮)
9月15日(祝) 午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭(大倭大本宮)
9月23日(祝) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

編集後記

平和な時代に感謝。一方で起こる悲惨な事件が後を絶たない。命をどう思っているのか？戦争が終わって63年が過ぎ、平和ボケしているのか、それとも人類に対して何かの警告がなされているのか？自然現象も含め今の自分たちの生き方に何かを考えさせられているように感じるこの頃です。

(のん)

第300回大倭会文化行事予告

秋の一泊旅行のご案内

一能登半島に海の神を訪ねる

皆さん、300回記念旅行です。お誘い合わせて参加ください。

■月 日：平成20年10月26日(日)～27日(月)

■行き先：能登半島=和倉・輪島方面
(気比神宮・千里浜海岸・輪島朝市など)

■お泊り：和倉温泉 ホテル海望
七尾市和倉温泉
TEL 0767-62-1515

■定員：40名程度

■費用等：詳しくは次号にてご案内致します。

■問合せ：世話人 湯浅 芳郎
TEL 090-6987-5847

第20回大倭会文化講演会

(共催：NPO法人むすびの家)

日時：平成20年11月8日(土)
午後2時より

場所：大倭紫陽花邑 拝殿
近鉄学園前南口より赤膚山行きバスで国際ゴルフ場下車、徒歩すぐ

講師：神谷文義さん
タイトル：交流(むすび)の家と私

講師プロフィール 1929年(昭和4年)愛知県半田生まれ。海軍の航空機製造会社に入社。B29による集中爆撃、東南海地震を体験する。昭和21年ハンセン病と診断され、昭和23年19歳、国により岡山県瀬戸内市にある国立療養所長島愛生園に強制隔離された。

※講演会終了後、大倭会館にて懇親会があります。(参加費用1,000円)

■問合せ：TEL 0742-44-0015 (大倭会)
TEL 0742-44-0776 (むすびの家)